巻頭言

“心に寄り添う”ということ

もう20年も前になるかと思いますが、私の教え子の一人で大学を卒業してから日本のNGO（非政府組織）の一員としてアフガニスタンで活動していた女性がいます。その頃のアフガニスタンは、9.11後のタリバーン政権とアメリカ有志連合という武力紛争という世界を巻き込む内戦状態が続き、命の危険と隣り合わせの生活を毎日余儀なくされていました。NGOの活動は、政府の組織とは異なり、安全性の面でも、経済的な面でも十分な保証がいつも約束されているわけではありません。そのような状況の中で、現地の人々の自由と人権、日々の生活を守ることを使命として活動を続けているわけです。

彼女は帰国した際には多忙の中にも、よく私に会いに来てくれていましたので、何度か「なぜそんな危険な場所で活動を続けているの？」と聞いたことがあります。必ず彼女は「アフガニスタンの最前線では今誰かがこども達に寄り添い、こども達の生活をサポートすることが必要なのです。でもそれは政府の組織はやらない。民間組織の私たちがやらなければならないことなのです」ときっぱりとした口調で答えるのでした。私は、世界中で日本が今の信頼と信用を勝ち得ていられるのは、そして国際貢献の実を具体的に果たしているのは、明らかに彼女たち最前線で活躍している民間の日本人の力であることは間違いのないことだと思っています。

しかしながら、その後2004年にイラクで、2008年にはアフガニスタンで日本人のNGO関係者が拉致され、射殺されるという事件が相次ぎました。その度に、日本の社会では、これらの活動に対する賛否の議論が繰り返されたのを憶えています。

こういった民間の日本人が、世界各地の紛争国や貧困地域の最前線で自らの命の危険性を省みずに地道な活動を続けていることによって、この国の今日の国際的信頼と繁栄が築かれ、守られていることをもっと私たちは理解するべきではないでしょうか。

卒業生が返した“こどもに寄り添う”という言葉の中には、ひょっとしたら彼女たちは国際貢献などという大上段に立った意識で毎日の生活を過ごしていたのではないのかもしれません。ただただ目の前にいる、家族を失い悲しみのどん底に陥ったこども達一人一人に、静かにそっと寄り添うことによって、こども達の心の平安を守ることに自身の強い使命を感じていただけなのかもしれません。

本学こども心理学科では、東北の震災で家族を失い、家を失い、心に大きな傷を負ったこども達の心にそっと寄り添い、心のサポートができる人材の育成を学科の理念として掲げてきました。着実にその芽が花開き、学科の卒業生達は社会の様々な場でその活躍が始まっています。

“心に寄り添う”という言葉を私達は簡単に使うことができます。しかし本当にその人の立場に立った寄り添いとはどういうことなのでしょうか？こども心理学科の学生の一人が、東北への被災者ボランティアに初めて行った際に、「助けたい」という思いが強過ぎて、一人の被災者の方から「こちらが望んでもいないことをされても、私たち被災者は“ありがとう”という言葉以外には言えないんだよ。ただ、そばにいてくれるだけでいいんだよ！」と言われ、被災者と支援者の難しさを感じるとともに、自分自身の心が楽になったと回顧しています。

まさに“心に寄り添う”ということは、人と人、心と心との触れあいなのです。

聖学院大学　人間福祉学部こども心理学科長　和田　雅史